

## 助詞「は」について

小 山 次 郎

- 1 はじめに
- 2 主題の「は」と対比の「は」
- 3 一つの「は」
- 4 むすび

### 1 はじめに

助詞「は」の意味・機能をどのようにとらえるべきかという問題をめぐっては二つの異なる考え方がありこれまで盛んに議論されてきた。その一つは、久野（1973）に代表されるもので次のようにその意味・機能の違いから「は」を二つに分けてとらえようとする考えである。<sup>(1)</sup>

- (1) a. 主題を表わす「は」：

太郎は学生です。

- b. 対照を表わす「は」：

雨は降っていますが、雪は降っていません。

あと一つは、これに対し「は」の意味・機能は一つであるとし単一の特徴づけですべての「は」を説明しようという考えである。本稿では、この両者の考えをそれぞれ検討して両者ともに問題点があることを指摘し、そしていわば第三の考え方があることを示したいと思う。以下、第2節では上の久野の区別を批判している柴谷の説を取り上げ、第3節では逆にその区別を取り入れ日本語の構文論全体の中でその位置づけをしている南の説を取り上げて検討することにする。

### 2 主題の「は」と対比の「は」

柴谷（1989, 1990）は上で述べたように久野の区別を批判して「は」を基本的に一つのものにとらえる立場を取っている。その点について論じている箇所を、少し長くなるが、柴谷（1989：405-6）から引用してみることにする。柴谷は、まず、久野の「二つの『が』」を批判した後「は」について以下のように述べている。

---

(1) 「主題」にかわって「題目」「トピック」、また「対照」にかわって「対比」という用語が使われることがある。以下では「主題」と「対比」を一貫して使用する。

久野は、「は」についても「主題の『は』」と「対照の『は』」を認めるが、これも「は」の文法的な本質を理解することによって、いわゆる「対照の『は』」というものは「主題の『は』」の本質とコンテキストとの作用から得られるものであるということが明らかになる。「は」の文法機能の中心はある事物の「引き分け」または「取り立て」にあり、「は」によってある物事が他と区別される点にある。「は」の作用域は、広く命題全体であったり、「は」によって指されたものだけとする理解も可能であるが、他のものと引き分け、区別するということが自体が対照ということの意味するのである。つまり、「は」を含む文は、その「は」の基本的文法機能の固有の特性として対照という意味合いを潜在的に持っているということである。そのような対照の意味合いは、普段は顕著に出て来ないが、コンテキストが対比をなす文を含んでいたり、含意している場合には、それが表出され、いわゆる「対照の『は』」が観察されるのである。例えば、「この本は皆が読んでいます」という文は、「その本は面白いですか」と聞かれた状況では対照の意味を強く表さないが、「あの本は難しいですが」が先行するコンテキストのもとでは、対照の意味が強調される。このように、「は」（または、「は」を含む文全体）が対照を表すかどうかは、コンテキストと「は」の文法機能に関わっていて、「主題の『は』」・「対照の『は』」というように二種類の「は」が使い分けられているのではない。

以上のように、柴谷は、主題の「は」と対比の「は」の区別はコンテキストつまりその文の発話状況によって生まれるものだと述べているが、確かにそうであるとすれば、文法の記述として一つの「は」を認めればそれで十分ということになるだろう。ただ問題は、はたして二つの「は」の区別がコンテキストだけによって決まるのかということである。次の文を見てみよう。

(1) この本は面白くはない。

主題とは「何かについて述べる」場合の「何か」に相当するものという一般の定義に従うならば、「面白い」という形容詞述語についた「は」は主題とは考えられない。また、この文は対比的なコンテキスト（例えば「面白くはないが役に立つ」など）以外では使われない。このように一つの文を見ただけでその「は」が対比的かどうか分かる場合もあるのである。そして、それは、以下に述べるように、「は」の文中での現れ方によってある程度は一般的な規則として述べることができる。とすれば、二つの「は」を認めることは、文法の問題といえるのではないだろうか。柴谷のいう「文法機能」とは何を意味するのか必ずしも明確ではないのだが、少なくとも日本語の文法の記述において二つの「は」を区別する理由は大いにありそうである。

それでは、主題の「は」と対比の「は」を区別する一般的規則について見ることにしよう。まず、(1)でもみたように述語につく場合は必ず対比として解釈される。否定文に現れることが多い。

## 助詞「は」について

(2) 私は悲しかったが泣きはしなかった。

(3) 私は金持ちではない。

副詞および形容詞・形容動詞の連用形につく場合も同様である。

(4) たまには勉強しなさい。

(5) そんなに速くは歩けない。

また数量表現と共に用いられると、肯定文では最小限、否定文では最大限という意味を表すが、これも対比の特殊化された意味といえるであろう。

(6) 一万円はする。

(7) 一万円はしない。

さて次に、名詞句についた場合を見てみよう。

(8) 太郎は学生です。

(9) この本は皆が読んでいます。

(10) 太郎には一万円やった。

(11) 奈良にはシカがいる。

(12) 学校ではよく勉強する。

(13) 太郎とはよく遊ぶ。

この例を見て一般的に言えることは、(8) のガ格名詞句が最も主題を表しやすいということであろう。(9) のヲ格名詞句及び(10) 以下の格助詞がついた名詞句は対比的に解釈されやすい。ただし、他の要因も関わっているようである。一つの文中に二つの「は」が現れる次の例を見てみよう。

(14) 太郎は中華料理は食べない。

(15) 中華料理は太郎は食べない。

(14) と(15) を比べてみると、文頭位置にある「は」は主題を表しやすく、逆に述語に近い位置にある「は」は対比を表しやすいた言えそうである。(14) は、太郎の食事の好みについて述べた文、(15) は中華料理を食べる人について述べた文、というのが最も普通の解釈であろう。さらに次の例を見よう。

(16) 太郎は東京へは行った。

(17) 太郎は東京へは新幹線で行った。

(16) の文の「東京へは」は、例えば「東京へは行ったが、親戚の所にはよらなかった」のように普通対比的に解釈されるのに対し、(17) の文の「東京へは」は、例えば「太郎は東京へは何で行了きましたか」に対する答えとして「太郎は」と並んで主題を表しているとも言えそうである。この違いはどこからくるのかといえ、(16) は「東京へは」の後にすぐ述語がきているのに対し、(17) ではその間にその文で最も重要な情報と考えられる「新幹線で」が入っているからであり、述語に近い位置にある「は」ほど対比を表しやすいた考えられる。次の文

も参照されたい。

(18) 太郎は東京へは新幹線では行かなかった。

以上、「は」の文中での現れ方によって、どのような場合に主題の「は」と解釈されやすいか、また対比の「は」と解釈されやすいか、についてごく大ざっぱに述べてみた。もちろん柴谷の言うようにコンテキストによって決まってくる場合も多いのであるが、コンテキストを離れてもかなりのことが言えることを示せたと思う。

次に上の引用文を離れて柴谷のあと一つの問題点を指摘したい。それは久野の説を批判しながら、久野が具体的に述べている二つの「は」の文法的ふるまいの違いについて触れることさえしていないことである。久野は、次のように、主題の「は」は連体修飾節の中に現れないのに対し、対比の「は」は現れる点を指摘している。

(19) a. 君は〔太郎が日本語ができる〕ことを知っていますか。

b. 〔太郎が好きな〕子は花子です。

(20) a. 〔太郎は来たが花子は来なかった〕こと

b. 〔太郎は好きだが二郎は嫌いな〕子は花子です。

分かり易くあといくつか例をつけ足しておく。

(21) \*ここは〔私は生まれた〕家です。

(22) \*〔切符は持っていない〕人は入れません。

(21), (22) のように対比的解釈が困難な場合「は」は、連体修飾節の中で用いることができない。(21)は「私が」(または「私の」), (22)は「切符を」とそれぞれしなければいけない。別の言い方をすれば、連体修飾節の中の名詞句を主題として取り立てることはできないということである。それに対して対比の「は」は、連体修飾節の中に収まってしまう。

(23) 私は〔夏は暑く冬は寒い〕奈良に住んでいます。

(24) これは〔日本ではあまり見かけない〕車です。

(25) 〔子供には見せたくない〕番組が多い。

(26) それは〔簡単には答えられない〕問題です。

このように主題の「は」と対比の「は」はその文法的ふるまいにおいても異なった面をもっており、柴谷の説はこの点においても難点を抱えていると言わざるをえない。

以上、「は」を一つのものにとらえる柴谷の説の批判を通して、日本語の文法を記述する場合に主題の「は」と対比の「は」を区別すべきであることを述べてきた。しかしこのことは、主題の「は」と対比の「は」が全くの別物であるということの意味するわけではない。次節ではこの節とは逆に二つの「は」の共通する点に目をむけることにしよう。

### 3 一つの「は」

南(1974, 1993)は、直接「は」を扱ったものではないが、「は」という助詞を日本語の構

文論の中でどのように位置づけるかという点に関し興味深い論を展開している。「は」の問題を検討する前にまず、本稿に関わる限りで、その構文論の概略を述べておくことにする。<sup>(2)</sup>

南は、様々な文構成要素を、それがどのような従属句内に現れるかを基準にして、次のように四種類に分類している。

- A. ～ナガラ、～ツツなどの従属句内に現れる要素
- B. ～ノデ、～ノニ、～テモ、～バ、～タラ、～ナラ、～トなどの従属句内に現れる要素
- C. ～ガ、～カラ、～ケレド、～シなどの従属句内に現れる要素
- D. いずれの従属句内にも現れない要素（終助詞など）

例えば、

- (1) [たばこをのみながら] おしゃべりしている。

の文において「たばこを」は「ながら」従属句内に現れていると解釈できる。一方、

- (2) 一人の女が [たばこをのみながら] しゃべっていた。

の「一人の女が」はあとの「しゃべっていた」にも係っていく点で「ながら」従属句の外にあると考えられる。そのことは「～が」を別々にたてた次の文が非文であることから分かる。

- (3) \* [一人の女がたばこをのみながら] 一人の男がしゃべっていた。

次に「ので」従属句について見てみると、

- (4) [一人の女がたばこをのんでいたので] 一人の男が注意した。

今度は、「一人の女が」が従属句の中に収まってしまふ。以上の観察から、「～を」はA類の要素、「～が」はB類の要素であることが分かる。同様に助動詞についても次のような例に基づいて分類される。

- (5) 子供にミルクを飲ませながら……
- (6) バトカーに追跡されながら……
- (7) \*子供にミルクを飲ませなかったながら……
- (8) 子供にミルクを飲ませなかったので……
- (9) \*子供がミルクを飲むだろうので……
- (10) 子供がミルクを飲むだろうから……

(5) (6) から使役「せる」受身「れる」は「～ながら」内に入るのだからA類の要素、(7) (8) から否定「ない」過去「た」は「～ながら」内には入らないが「～ので」内には入るのでB類の要素、(9) (10) から推量「だろう」は「～ので」内には入らないが「～から」内には入るのでC類の要素とそれぞれ分類される。また、従属句自体も一つの要素であり、例えば、「ながら」従属句はA類の要素、「ので」従属句はB類の要素となる。

南は、このように文構成要素を分類したあと、さらに、各要素の意味がAからDに進むに従ってより客観的事態や論理的関係にかかわる性格から言語主体の態度や情意の面にかかわる性

---

(2) 以下の例文は論点を明確にするためのものであり、南の完全な引用ではない。

格が強くなっていくことに注目し、日本語の文はその要素の現れに応じた次の四つの段階から成り立つという構文論を展開していつている。

- A. 描叙段階
- B. 判断段階
- C. 提出段階
- D. 表出段階

さて、問題の「は」であるが、南は、主題の「は」と対比の「は」をはっきりと区別し、主題の「は」はC類、提出段階の要素、対比の「は」はB類、判断段階の要素という位置づけをしている。そしてその根拠として、主題の「は」はB類従属句及び連体修飾句の内に生起しえないのに対し、対比の「は」は現れることをあげている。連体修飾句については既に上で見た通りであるので、ここではB類従属句内に現れるかどうかを検討することにしよう。まず次の二つの例を比べてみよう。

(11) 太郎はたばこを吸っていたので癌になった。

(12) 太郎がたばこを吸っていたので癌になった。

ここで「癌になった」のは誰かと考えてみると、まず(11)ではそれは太郎以外考えられない。従って「太郎は」はB類「ので」従属句の外にあることになる。一方(12)は「太郎が」が「ので」従属句の内に収まりうるので、太郎の周囲にいる人が間接喫煙の影響で癌になったという解釈が可能である。違いを示せば次のようになる。

(11)' 太郎は〔たばこを吸っていたので〕癌になった。

(12)' 〔太郎がたばこを吸っていたので〕癌になった。

以上、主題の「は」はB類従属句に収まらないことからC類の要素と考えるとよさそうである。では対比の「は」はどうか。

(13) 今日の試合は〔テレビでは放送しないので〕ラジオで聞く。

(14) 〔すぐには答えられないので〕だまっていた。

(15) 〔太郎は行くのに〕花子は行かない。

(16) 〔東京でははやっているのに〕大阪では人気がない。

(17) 〔暇はあっても〕金がない。

(18) 〔金を出しても〕口は出さない。

これを見た限りでは、確かに南のいうとおりB類従属句「ので」「のに」「ても」の内に収まってしまっているので、B類の要素と考えられそうである。ところが、さらに同じくB類とされる他の従属句に目を向けると問題が出てくる。「ば」「たら」「なら」「と」の条件を表す従属句内には主題、対比を問わず「は」は生起できないのである。

(19) 太郎は〔酒を飲んだら〕いつも真っ赤になる。

(20) \*今日の試合は〔テレビでは放送しなかったら〕ラジオで聞く。

## 助詞「は」について

- (21) \* [太郎は行くなら] 私は行かない。
- (22) \* [金持ちではないなら] 結婚しません。
- (23) \* [一万円はしなければ] 買しましょう。
- (24) \* [東京でははやると] すぐに大阪でも人気が出る。

まず (19) 主題の「は」については従属句内に収まらないこと (11) と同様である。ところが、(20)～(24) の対比の「は」についてもこれらの文がすべて非文であるところから分かるように従属句内で「は」を使うことができない。この点、(13)～(18) と異なっている。この現象はどのようにとらえればよいのだろうか。一つの方法は、対比の「は」が現れないのは条件文との意味的不整合によると考え、これを例外として、主題の「は」はC類、対比の「は」はB類という区別をそのままにしておくことである。あと一つの方法は、主題の「は」はC類とするが、対比の「は」はB類とC類にまたがってその両方の性格をもっていると考えることである。言い換えれば、主題の「は」と対比の「は」は異なる面もあるがまた共通する面もあるとしてその両面をそのまま認めていこうとする立場といえる。筆者はこのあとの立場を取りたい。その理由は、共通する点がこの現象に限らないからである。その点に移ることにしよう。

次の例文を見られたい。

- (25) Taro is playing in the backyard.
- (26) 太郎が庭で遊んでいる。
- (27) 太郎は庭で遊んでいる。

(25) の英文に対し日本語では (26) と (27) の二つの表現が可能である。この二つの表現の違いはよく知られていて、前記の柴谷 (1990) の中でも深く考察されている。柴谷の言葉を借りてその違いを述べれば、(26) は「事象をいわば丸ごと把握し、提示した」「事象の生起のみを述べる」文であるのに対し (27) は「判断の対象である事象のなかから、ある存在物を取りだし」「二分し、また結合している」文である。要するに「は」を用いない文は単に現象を描写した文であるのに対し、「は」を用いた文はあるものを取り立ててそれについて述べた文といえる。この違いは従来無題文と有題文の対立ととらえられてきているが、ここで問題にしたいのは、この対立が主題の「は」対比の「は」を問わず成り立つということである。次の例を見られたい。

- (28) 太郎は庭で遊んでいるが、花子は家で勉強している。

(27) と (28) を比べてみて何が違うのだろうか。あるものを取り立てるという点においてはまったく同じであり、その意味で (26) の現象描写文と大きく対立している。この点において柴谷が「は」を基本的に一つのものにとらえようとしているのはまったく当然のことであり、南のように主題の「は」と対比の「は」を異なる類に分類しはっきり区別した場合、この共通性を説明するのは難しいと思われる。

#### 4 むすび

以上、第2節では日本語の文法の記述において主題の「は」と対比の「は」を区別すべきであること、また文法的ふるまいにおいても異なる点があることを示し、一方第3節では逆に二つの「は」の共通点について述べた。そして主題の「は」と対比の「は」には異なる面と共通する面の両面があり、そのどちらか一方だけを強調した柴谷、南は両者ともに問題があることを指摘した。最も妥当な考え方は、その両面をそのまま認めていくことだと結論づけられる。

#### 参 考 文 献

- 久野 暲 1973 『日本文法研究』 大修館書店
- 柴谷方良 1989 「日本語の語用論」 『講座日本語と日本語教育第4巻：日本語の文法・文体（上）』 明治書院
- 1990 「助詞の意味と機能について——「は」と「が」を中心に——」 『文法と意味の間』 くろしお出版
- 南不二男 1974 『現代日本語の構造』 大修館書店
- 1993 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店